いわての NPO・ボランティア活動情報誌

2025 vol.2

ぱいん PIN

Paper Iwate NPO

NPOのはじめの一歩

「NPOの専門性」

- 連携事例集「NPO×教育機関」「NPO×企業」
- 岩手県からのお知らせ
- 岩手県社会福祉協議会／ボランティア・市民活動センターからのお知らせ
- ユース世代に聴いてみよう

環境カウンセラーによる講演
冬の窓の断熱対策：
ビニールカーテンを紹介

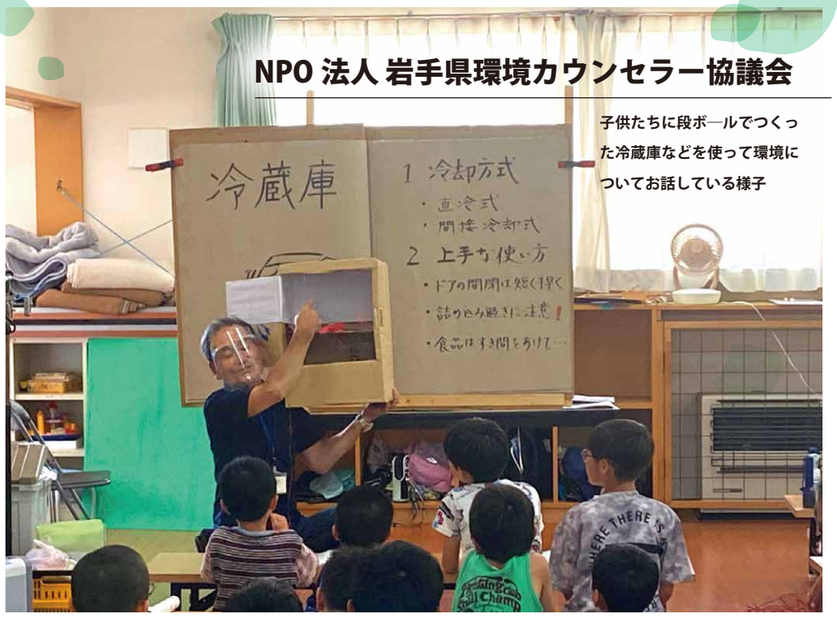
特集

はじめの一歩！「NPOの専門性」

start !

様々な分野やテーマで活動・活躍している岩手県内のNPO。分野に限らず特定の専門性をもつ団体もありますのでご紹介します！

NPO 法人 岩手県環境カウンセラー協議会



子供たちに段ボールでつくった冷蔵庫などを使って環境についてお話している様子

NPO法人岩手県環境カウンセラー協議会は、県内の環境カウンセラー登録者の会として1999年に発足し2001年に法人化、いわて環境塾の受託運営や環境カウンセラー利活用の広報活動など様々取り組んでいます。理事長の林俊春さんと会員の高橋功さんにお話を伺いました。

環境カウンセラーとは？

環境カウンセラーとは環境省が実施している登録制度で、環境保全に関する豊富な経験や専門的知識を基に、市民・NGO・事業者などの行う環境保全活動への助言などを行う方々です。

平成8年から毎年公募と審査が行われ、事業者部門（主に企業、事業者などへの助言を対象）と市民部門（主に地域・学校など、市民への助言を対象）で、それぞれ一定の基準を満たした方を環境大臣が環境カウンセラーとして認定・登録しています。

"環境"のイメージの変化

1999年に有志で会を発足した当時、東北に環境に特化した団体はなく、環境と言えばゴミ問題やリサイクル促進というイメージだったそうです。約30年の間に、社会の変化とともに関心は地球温暖化や生物多様性へと移行してきました。近年は世界的な気候変動も顕著で、事業者は環境への配慮だけでなく熱中症など従業員への対応も必要になり、また、地域でも熊や野生動物との共存への知識や対策も求められています。

岩手県環境カウンセラー協議会の会員もそれぞれが「身近な環境の専門家」として活動する意欲が求められ様々に取り組んできました。

企業を支える専門家として

林さんは、環境に関する機械開発の仕事をしていたことから活動を始め、事業部門の環境カウンセラーに認定された後は東北6県の企業の環境マネジメントシステムへの審査や助言などを行ってきました。環境カウンセラーの認知度は少しずつ広がっているものの、実は人数は減少しているそうです。

「定年が55歳だった時代には、仕事で環境に携わった人たちが定年後に専門性を活かせる一つだったが、これからは、若い世代も参加しやすくしてカウンセラー認定に挑戦する人を増やしていきたい。カウンセラーは知識や主体的に取り組むことが求められるが、全国のネットワークもあり最新の情報や専門知識を得ながら取り組んでいくことができる」と感じているそうです。

"ダンボールの功"が生み出すワクワク

元々電気屋さんだった高橋功さんは、エネルギーに関する知識を活かして地域貢献できないかと考え、岩手県地球温暖化防止活動推進センターの派遣講師としての活動を経て、市民部門の環境カウンセラーに認定されました。ダンボールなど身近な材料でつくった教材を使って、温暖化対策を推進するための省エネ・再エネを体感する環境教室を県内各地で行っており、何でもダンボールで教材や模型をつくるので「ダンボールの功」と呼ばれているそうです。

「やりがいは、環境教室などで話をすると、子どもから大人まで様々な気付きとワクワクして目が輝く機会に出会うことです。自分自身がワクワクしないとできないので、分かりやすく伝えるための教材づくりも工夫の一つです」と話してくれました。

受賞が示す取組の広がり

2023年度には、法人として環境カウンセラー環境保全活動の地域特別貢献賞、高橋功さんは環境大臣賞を受賞しています。環境への関心やイメージは個人のライフスタイルや状況に応じて異なるものの、企業活動や一人ひとりの生活にも密接に関わっている現在、カウンセラーのみなさんは環境の取組に関する伝道師だと感じました。

興味を持った方はぜひ深堀りしてみてください！

チップボイラー見学

水力発電の様子を紹介

大学生対象の環境レクチャー

イオンモール盛岡南での展示

環境省 環境カウンセラー環境保全活動の受賞歴も

子供にもわかりやすい！

活動の詳細はＳＮＳやホームページでチェック！

NPO法人岩手県環境カウンセラー協議会

hayashi9627@h9.dion.ne.jp
0198-24-9627

HP

NPO活動交流センターこう使おう！

ボランティア情報

NPO活動交流センターが情報スペースやHPで行っている情報発信の中で、今まで以上にボランティア情報に力を入れていきたいと考えています。

NPO法人や市民活動団体の活動や地域イベント等でボランティア募集の発信にぜひご利用ください。

＼ボランティア情報のページ／

NPO活動交流センター
TEL：019-606-1760
MAIL：n-katsu@aiina.jp

岩手県 NPO 活動交流センター サイト→

連携事例集

Case study

地域課題の解決や社会貢献のための様々な活動について、NPO 単独で行うのではなく、企業や行政と連携・協働することで新たな成果が生まれています。岩手県内のそんな事例をご紹介します。

事例1 共に生きる学びをつくる

NPO× 教育機関

NPO 法人 miraito（ミライト）

学校法人カナン学園三愛学舎

NPO法人 miraito は、2025年4月から学校法人カナン学園三愛学舎の Re＋（レタス）プロジェクトや総合探究の事業を受託し、理事長上田彩果さんと副理事長川島レラさんを中心に携わっています。

両者の出会いは2025年1月。miraito が法人設立前から岩手町に開設している、10代のための第3の居場所「ユースセンターミライト」を利用していた中学生との縁で、川島さんが一戸町奥中山に校舎を持つ三愛学舎を訪問しました。本人曰くほぼ「飛び込み」の訪問でしたが、その場で、三愛学舎事務長の箱﨑浩二さんから「一緒にやりましょう」との言葉をもらいました。

ユースセンターミライトは、高校生の、正解のない問題に向き合いアクションすることで学ぶ「マイプロジェクト」のサポートを目指していましたが、利用者には知的障がいなど特性を持つ子ども達も多く、課題を感じていました。一方、三愛学舎は岩手県内唯一の私立特別支援学校として盛岡や二戸圏域から生徒を受け入れる中で、学校のオリジナリティや地域にひらく学校である必要性を感じ、2年前から地域と一緒につくる学びの事業の設計を進めていました。事業開始に向けて地域で共に取り組める相手を探していた箱﨑さんは、ミライトの取組を聞いた時に「まさにやっていきたいことを実践していた」と感じたそうです。

探究学習の授業を週2回担当する川島さんは「他校でも探究学習など実践していますが、三愛学舎での授業は子ども達とのコミュニケーションや思いを引き出すことが難しく毎回冷や汗ものです。でも、彼らなりの探究って何だろう?と、教える側が悩み続けることにも意味があると思います。それは、特性の有無に関係なく不登校やミライトに来る子どもたちへの対応にも還元できると感じています」と、話してくれました。

今年度、中学の時にミライトを利用していた子が三愛学舎に入学し、他の子たちよりスムーズに高校生活をスタートさせ、クラスにも良い影響を与えているそうです。箱﨑さんは「こうした流れは学舎全体への良い影響にもなるし、生徒に限らず教職員もこれまでなかったつながりを得て可能性を広げている」とも感じているそうです。

Re＋（レタス）プロジェクトとは

2025年度から三愛学舎で開始した学びを通して共に地域の未来を創る取組のひとつ。地域を応援し地域からも応援されることも目指し、カリキュラム設計をmiraitoや岩手大学が担っています。地域の魅力を見つめ直し「Re」、新しいアプローチを加える「＋（足す）」、更に奥中山の特産物であるレタスをかけて命名。現在、奥中山地域の野菜農家と協力し学習を進めています。

NPO法人 miraito

2020年から県北でキャリア教育事業を開始し、2023年岩手町に「ユースセンターミライト」をオープン。2025年に法人化。子どもや若者が自分らしく生きるための居場所づくりや人材育成を行っている。

HP

学校法人カナン学園三愛学舎

一戸町奥中山に1978年に開校した私立の特別支援学校。知的障がい等のある生徒が学ぶ高等部単置校で、本科3年と専攻科2年の青年期教育を行っている。

HP

事例2 生きがいを一緒に育てる

NPO× 企業

スローレジ

スロー
ショッピング号

NPO 法人やまぼうしネットワーク

株式会社マイヤ　岩手ダイハツ販売株式会社

NPO法人やまぼうしネットワークは、認知症当事者や家族を支える活動としてスローショッピングに取り組んでいます。理事長の紺野敏昭さんは滝沢市でクリニックを開業している認知症専門医です。長年当事者や家族と関わる中で、認知症になると買い物行動を自ら止めてしまったり、禁じられることで自信、意欲、存在意義を失って閉じこもりがちになってしまう人が少なくないことを知りました。そこで、スーパーでの買い物を通じて、求める商品を自分で選択し決める喜び、自立心や尊厳の回復につなげたいと構想を練り、2019年3月に株式会社マイヤに協力をお願いし、快諾を得て「認知症になってもやさしいスーパー・プロジェクト」として準備を始めました。

「当時、全国でも前例がなく社会福祉協議会や地域包括支援センター、認知症の人と家族の会を交えた打ち合わせを10回程重ねて、紺野さんが提案するアウトラインにみんなで具体案を肉付けしていきました」と語るのは、株式会社マイヤ取締役の辻野晃寛さんです。一過性ではなく継続した取組にするためには、それぞれが小さな負担でできる形が重要でした。辻野さんはまた、認知症サポーター養成講座の店内イートインスペースでの開催も提案・実現しました。スローレジ（優先レジ）を設置することや、普段でも従業員が認知症のお客様に対応できるように会社として学べる機会を設けたいとの思いがあったそうです。同年7月にマイヤ滝沢店でスローショッピングを開始し、滝沢店では従業員全員が認知症サポーター養成講座を受講、現在はマイヤグループで2割の従業員が認知症サポーターとなっているそうです。また、売り場の案内表示の改善やショッピング用カートに売り場案内図を取り付けるなど工夫も進めてきました。

2023年に市民が主体となって活動することをめざしてNPO法人化しました。また、現在までに岩手ダイハツ販売株式会社から2台の車両貸与を受け、スローショッピング号として参加者への生活支援で活躍しています。法人理事の櫻野正之さんは、認知症であった奥様がスローショッピングに5年間休まず参加され「ボランティアの方々との交流もあり笑顔が増えて穏やかに過ごせていた」と話してくれました。

ボランティアのみなさん

スローショッピングとは

認知症当事者や高齢者などが、ゆっくり安心して買物を楽しめるようにするための取組。やまぼうしネットワークが行う取組では、認知症サポーター養成講座を受けた方々がボランティアで買物パートナー（オレンジのバンダナが目印）となり会話しながらサポート。会計はスローレジ（優先レジ）で本人のペースでゆっくり支払いができます。現在、滝沢市、盛岡市、陸前高田市、宮古市などで実施され、全国へ広がる取組となっています。

特定非営利活動法人 やまぼうしネットワーク

認知症等の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるまちづくりを目指し、当事者や家族・介護者への生活支援、支える人や医療との連携、地域への啓発活動も行う。

HP

株式会社マイヤ

岩手ダイハツ

認定ＮＰＯ法人取得・更新情報

令和６年度に認定取得・更新したＮＰＯ法人のうち、２法人を紹介します。

認定特定非営利活動法人　岩手県就労支援事業者機構

刑務所出所者等や非行少年の円滑な社会復帰と、安全・安心な地域社会の実現を図るため、刑務所出所者等の就労支援や再犯防止に向けた活動を行っています。

【認定期間】
平成 27 年 1 月 29 日
～令和 12 年 1 月 28 日

岩手県就労支援事業者機構サイト→

認定特定非営利活動法人　Plus One Happiness

『君の“やりたい”を“できる”に変えるプロジェクト』と題して、障害児に様々な“遊び”や“体験”を届けるなど、現在の制度では置き去りにされている部分を補う活動を主として、障害児・者とその家族を支援している団体です。

【認定期間】
令和６年12月12日
～令和11年12月11日

Plus One Happiness サイト→

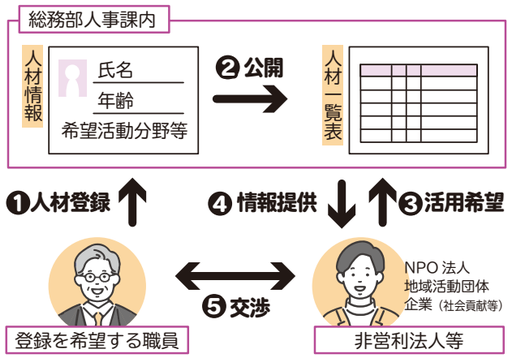
認定 NPO 法人制度に関する相談窓口

岩手県 環境生活部 若者女性協働推進室
認定 NPO 法人専門員（月曜～木曜 8:30 ～ 17:00）
019-629-5199

岩手県パラレルキャリア人材バンク

岩手県では、職員の能力を活用した地域貢献活動の支援を目的として、**「岩手県パラレルキャリア人材バンク」**を設置しています。

これは、職務で培った経験を生かした地域貢献活動を希望する職員を募り、活用を希望するＮＰＯ法人等からの依頼に応じて情報提供を行い、**職員と団体のマッチング**を支援する仕組みです。



例えば…

- 会計事務や各種書類作成の補助
- イベントの企画運営経験のある職員によるワークショップのサポート

また、専門人材としての活用だけでなく、一緒に活動するメンバー募集の場としても活用いただけます。

職員の得意分野など、登録人材の情報は県のホームページで公開していますので、お気軽にお問い合わせください。

詳細はこちら

詳細については、県ホームページ等でお知らせしますのでご覧ください。

岩手県パラレルキャリア人材バンクサイト（岩手県人事課）→

災害時における被災者支援の取組紹介

いざという時に備える！「平時からの顔の見えるつながり」

毎年のように起こる大きな災害

近年、日本では毎年のように大規模な自然災害が発生し、甚大な被害をもたらしています。

昨年は能登半島地震、山形県・秋田県豪雨災害が発生し、今年に入ってからも、2月に大船渡市での大規模林野火災、8月の大雨では14道府県において被害が発生しており、災害が頻発化、激甚化、広域化しています。

被災地で活動するボランティアセンター

災害が起きた場合、被災地の社会福祉協議会では、災害ボランティアセンターを立ち上げ、被災者の生活再建に向けて、様々なボランティアの力をつなげる役割を担い、被災者宅の泥かき、ガレキ撤去作業や困りごとの相談支援などを行っています。しかし、従来の社会福祉協議会主導による対応にも限界があり、災害ボランティアセンターの運営を支援する担い手が必要となってきます。

研修訓練 @ 二戸

地域みんなで助けあう仕組み

地域には、民生委員、自治組織、行政、支援団体、NPO、専門職団体、企業など様々な関係者がおり、このような多様な担い手と連携し、被災者のニーズに合わせた柔軟かつ迅速な支援を提供する「地域協働型災害ボランティアセンター」の必要性が高まっています。来るべき災害に備え、平時からこのような関係者の方々と情報交換をするなどして顔の見える関係を築いておくことで、被災者のニーズにきめ細かに対応する支援ができます。

研修訓練 @ 一関

岩手県社協の取組とつながりづくり

岩手県社会福祉協議会では、県内を10広域に分けて、市町村域のネットワーク連絡会議の開催支援や市町村における災害ボランティアセンターの設置運営研修訓練に取り組んでいます。平時から関係機関との連携を強化するとともに、災害時には被災者や被災地域に寄り添い、生活再建に向けた支援を円滑に行うことができるよう取組を進めています。

＊ボランティア保険は、**最寄りの社会福祉協議会**で加入できます。
＊加入手続完了日の翌日午前０時から補償開始です。お早めにお申込みを！
＊社会福祉協議会が関わらないイベントでも加入可能です。保険の詳細は、福祉保険サービスホームページをご覧ください。

福祉保険サービスホームページ

お問合せ
岩手県社会福祉協議会
ボランティア・市民活動センター
TEL:019-637-4483　FAX:019-637-7592

ずっぱりボランティアいわてサイト

いわてのNPO・ボランティア活動情報誌
PIN ぴいん
2025 vol.2
令和7年12月22日発行　発行：NPO活動交流センター
〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1いわて県民情報交流センター「キオクシア アイーナ」6F
TEL019-606-1760 Fax 019-606-1765
PIN（ぴいん）は年3回、約NOOO部発行しています。

ユース世代に聴いてみよう
interview

ユース世代の活動と
インタビューをお届けします

ゆきわたり工房

そば刈り

プリン

集合！

試作品

ゆきわたり工房
YUKIWATARI FACTORY

yukiwatari.factory@gmail.com

メンバー募集中！岩手大学以外の学生も参加できます！
活動の詳細なども気軽にお問合せください。

ゆきわたり工房は岩手大学生により2023年9月に発足し、①社会貢献、②地域活性化、③商品開発の3本柱を掲げ、地域名産品を使った商品開発や子ども食堂の実施などに取り組んできました。現在は大学を問わず学生メンバーを募集しながら任意団体として活動しており、「学生だからこそできる挑戦を形にしたい」と様々なチャレンジを続けています。

これまでに地域や団体などとコラボし、盛岡市簗川（やながわ）地域の蕎麦を利用したそば茶プリンや、岩手県産のメープルを使ったトレイルバーを製品化しました。ただ商品を開発するのではなく、パッケージ作りや実際の仕入れ・製造・販売も自分たちで行っています。今年7月には団体としてキッチンカーを購入し、柔軟かつ機敏さを備えて地域のイベントへの出店も行っています。イベントに応じて地域の商品も一緒に販売し、PRや発信の機会提供にもつなげています。一過性ではなく各地域が継続して盛り上がっていくことを目指すゆきわたり工房ならではの取組です。

代表の中川美生さんは「この2年間様々な方と関わる中で、自分たちの団体について伝えること、企業や事業者へのアプローチ、SNSでの発信、商品販売での接客などたくさんの実践と改善を重ねてきました。「自分から動く」意識も高まりメンバーそれぞれ成長できたと思います。」と話してくれ、常に商品の質にも団体としての活動の質にもこだわって真摯に取り組んでいる様子が伝わってきました。団体名は宮沢賢治の童話『雪渡り』から発想を得て、更に自分たちの活動が地域に「行き渡りますように」との思いが込められているそうで、まさにこれからの広がりや多様な展開が楽しみです。

編集後記

年末のお届けとなりましたが、2025年度第2号ぜひお楽しみください。今回、取材で団体名の由来を伺うことがあり、宮沢賢治『雪渡り』を始めて読む機会になりました。自然の中で生きる狐たちと人間の子どもたちの交流の話で、子ぎつねの紺三郎が偏見や先入観を持たずに子どもたちと接する様子や言葉がじわじわと心に沁みてきました。団体名は分野や専門性が明記されたり、花言葉から活動への意味が込められていたり、思いを言葉に乗せたり様々で興味深く、今回のような新しい発見もあるので由来を聞くことにハマりそうです。

（N.S）